

第 14 回関西建築家大賞 審査講評

審査建築家 榎 文彦

今回 JIA 近畿支部の第 14 回「関西建築家大賞」に対して 13 人の応募があり、夫々の建築家の作品 2 点、合計 26 点を 6 月 15 日、東京 JIA 本部において審査。その結果、4 点の作品を実際にみることに決定。10 月 5 日、晴天の日に支部の方々の案内によって各施設を訪問。その時の印象に基く候補者作品へのコメントがそのまま各作品の評価に繋がっているものと諒承して戴きたい。

■ 日本圧着端子製造(株) 岸下真理

大阪 淀屋橋に近い雑居ビル群がひしめく中で、前面木ルーバーで表層が覆われたこの中層ビルは視覚的にも異彩を放っている。樹齢が異なり、様々な地域から集められた木ルーバーは人間の皮膚のように一様でなく、それがかえって人間の肌を感じさせる親しみを与えて呉れている。室内に入るとその木製の縦ルーバーの外に、建具、天井、床或いは座にも徹底して木が使用され、特に日本的家具と共に統一感のある建築を提供している。

作品図面をみていた時から気がついていて、是非実際に体験してみたいと思っていたのは、略 35m×30m の領域の中に設けられた 5 つの段段群によって構成される半階ずらされた空間と各所に設けられた吹抜け空間がどのような空間体験を与えて呉れるかという事であった。そしてそこに働くと人々がどのように交わりあっているか。

将来の増員をめざして現在必要な面積以上につくった為か、社員は比較的まばらに配置され、彼等の動きにも出会うことが出来なかった。ともあれ、若い岸下氏の意欲的な作品であることには間違いなく、今後の活躍を期待出来るエネルギーに満ちた姿勢に大変好感をもった。

■ クマリフト彩都研修開発センター 永田祐三

事前の書類選考において、その清楚でケレン味のない、白色の様々な直方体がつくり出す姿に強い印象を受けた。そしてその姿の背後にどのような空間が内包されているか、是非、それをみてみたいという欲求がこの建築を最終選考の 4 つの内の一つに選んだ理由であった。大阪モノレール彩都西駅の近くの小高い丘にたつこの建築の南西端部の姿は期待通りであった。既に平面図で示されるように中央廊下を中心に配列された大・中・小の様々な部屋群は決してドラマティックなものはない。しかし白の空間を濃密な建築に育てる為、採光のあり方、開口部のディティール。敷居の色彩、白色の天井と壁のデザインの一体性等、細かいところに注意深い配慮がなされている秀作である。夫々の空間は茲で働く人達を暖かく包容しているようだ。特筆すべきは永田氏は 1940

年代に生れ、村野藤吾賞を始め、数々の賞を得て、所謂ベテラン建築家であり、外にもコクのある作品も数々つくってきた建築家であるに違いない。

しかし、恐らく茲で与えられたプログラム、そして限られた予算に応えるべく簡素でしかしレベルの高い作品をつくり出していることに対して敬意を表したいと思う。

■ 岡田茂吉記念館 松尾和生

13 の作品の中で屋敷ともいえる 3 つの建物群がどのように周辺の豊饒な京都の自然の中で一つの集合体をつくっているかへの関心と興味があった。京都嵯峨野は景勝の地として知られているが、とりわけこの広沢池周辺は春夏秋冬異なった趣を与えて呉れるところである。その期待に背かぬ緑の豊かな庭園と背後に展開する眺望の中に三つの建物群は静かな佇まいをみせていた。設計者の解説にもあるように、構造的にも工夫を凝らした柱をみせない凜とした奥深い水平軒線はその前面に展開する豊かな風景に力強い枠組を与えていた。特に印象的だったのは前面の二棟は高く持ち上げられ、それ等を繋ぐ陸橋によって、北棟から地上の目線で陸橋を通して後方の風景を享受し得る仕組みになっている点であった。工夫を凝らした庭園と共に細い架構の陸橋は視るものの眼を楽しませて呉れる。建物自体も、天井、屋根面のデザインもよく考えられた秀作である。

■ 近畿大学東大阪キャンパス整備計画 畠山文聡

このキャンパスは東大阪市内にあるということで、日本圧着端子製造社の後に 2 番目に訪問した。狭い道路から校門をくぐると眼前にキャンパスが開かれている。最初に案内された国際学部棟の中央に位置を斜めにずらしたアトリウムがダイナミックに 5 層の空間を示していて気持ちが良い。そして国際学部棟と同様に木格子が卓越した表層をもった 3 号棟と 1 号棟に囲まれて低層の 5 号棟が展開していることが、3、4 階あたりからみるとよくわかる。このキャンパスの 2 層の 5 号館はキャンパス全体が更新されていくプロセスの中で何か新しいものが出来つつありますよというメッセージが高らかに謳いあげられている。何故ならば私も含めて、茲に足をふみ入れたものは全く異なった空間体験を与えられるからである。周縁の建築がつくり出す軸性に守られてきた空間群と異なって、異なった 4 本の軸線に沿って展開される二十数個の小空間、その間に様々な位相をもった外部空間をつくり出している。透明な表層によって、緑の外部空間と共に重層する視線の展開を可能としている。そしてその小空間は図書、ワークショップ、ロビー等様々な機能をもった様々な活動領域を形成し、学生達は楽しげにそこを歩き来している。

.....

■ 総評

今回関西建築家大賞を決定するのは一人の選考者である。従ってその選考者が建築の何を重要視するかによってその決定が左右される。

私の場合、既に様々なところで言及しているように空間の質を重要視し、その空間の人間に例えれば生き様に強い関心がある。

ヴィルトヴュウスは建築における三つの基本的価値として用・強・美を挙げている。ラテン語の *venistas* が美にあたる。しかし最近ヨーロッパの学識者の一人がヴィルトヴュウスが *venistas* に託した意味は美ではなく悦びではなかったかと提案している。何故ならば悦びは美以上に普遍的な価値をもっているからだという。私は建築の姿よりも空間がそうした悦びを与えている機会が多いと思う。

今回近畿大学のキャンパスを訪問し、限られた時間の中でキャンパス全体を構成するすべての棟を訪れる時間をもたなかったが、5号棟に足を踏み入れた瞬間、眼前に展開する空間体験は今までになかった新鮮なものであり、又感動的なものであった。一見メイズ的に連鎖する空間体験であるが、眼をあげれば、1号棟、3号棟そして国際学部棟の木格子の表層が、羅針盤の役割を果たして呉れている。そして学生達の振舞いからも彼等がこれ等の空間のもっている自由度と規律を十分に理解して利用していることを窺いしることが出来るのだ。

私はこうした新しい空間体験を可能にしたデザインの背後には、恐らく様々な試みを通して最終的に目的とするデザインを獲得するまでの努力、そして当初より一貫して存在し続けたヴィジョンに対して深い敬意を払いたいと思う。それが畠山文聡氏を関西建築家大賞に選ばして戴いた所以である。

勿論他の三作品についても、どのような姿勢で建築の社会性を獲得されようとしたかその試みのあり方について茲でその詳述は避けるが、建築設計理念の領域の深さを一つ一つ体験させて戴いた。

最後にこのあわただしい日程の中でスムーズに充実した一日を過ごさせて戴き、あらためて現地審査に同行された木村博昭先生をはじめとする有志の方に感謝したいと思う。